

# 景泰帝の諡号の恭仁康定景について

滝野 邦雄

## はじめに

憲宗成化帝は、諡号として「景」字を景泰帝に贈る。これは、漢景帝<sup>1)</sup>に贈られたのと同じ諡号である。漢景帝は、『漢書』に、

……周は成〔王〕・康〔王〕と云い、漢は文〔帝〕・景〔帝〕と言う。美<sup>うるわ</sup>しきかな（『漢書』景帝紀・論贊）。

①『史記』周本紀に「成〔王〕・康〔王〕、天下 安寧にして、刑 錯（捨て置く）され四十餘年用いられず」。

とあり、父の漢文帝とともに、周の成王・康王とならぶ皇帝であった、と称される皇帝であった。憲宗成化帝は、この漢景帝の諡号の「景」字を景泰帝に贈ったのである。

ここからすると、景泰帝を褒めたたえて「景」字が贈られたかのように見える。しかし、景泰帝によって一度は皇太子の地位を追われた憲宗成化帝の気持ちを推し量ると（詳しくは拙稿「明・景泰帝の帝位復活について」（『経済理論』388号）参照）、景泰帝を称賛して「景」という諡号を贈ったようには考えられない。

そこで本稿では、憲宗成化帝はどのような意味を込めて景泰帝に「景」という諡を贈ったかについて検討を行ないたい。

## (1) 恭仁康定景皇帝

『明史』によると、明朝の皇帝の諡は、十七字であったという。

凡そ諡は、帝十七字、后十三字、妃・太子・太子妃 並びに二字、親王一字、郡王二字、字〔数〕を以て差（等級）を爲す（武英殿版『明史』卷七十二・志第四十八・職官一・十九葉）。

この十七字の内訳について、査繼佐（字は伊璜、号は東山。浙江海寧の人。明・萬曆二十九年〔一六〇一〕～清・康熙十六年〔一六七七〕）は、『罪惟録』でつぎのようにいう。

1) もともと漢代の皇帝の諡には、惠帝以下尊号として「孝」字が附せられていた。『漢書』惠帝紀の「孝惠皇帝、高祖太子也」条に顔師固（南朝・陳の太建十三年〔五八一〕～唐・貞觀十九年〔六四五〕）は、  
〔顔〕師固 曰く、孝子 善く父の志を述ぶ。故に漢家の諡は、惠帝以下 皆な「孝」と稱するなり（『漢書』惠帝紀・「孝惠皇帝、高祖太子也」条）。  
と注している。「孝子」であり父の志を遂げたから、諡の上に「孝」をつけるというのである。（補注）

初め定制として、皇帝の崩じ、諡を<sup>かんが</sup>工うるに、<sup>おおむ</sup>率ね十六字、<sup>す</sup>摠ぶるに一字を以てす。皇后は十二字を用い、帝の諡の統ぶるに一字を以てするに従う（『罪惟録』卷之七・志・諡典）。皇帝の諡号の十七字のうち、最後の一字が本来の諡となり、その上の十六字は、増加された諡（尊号）になるという。

ところが、景泰帝には、全体を統べる諡号として「景」が贈られたものの、尊号は十六字ではなく、「恭仁康定」の四字のみであった。

では、この尊号や諡号はどのような意味を持ったものであったのだろうか。

### ①「恭仁」・「康定」

浅学の私の調べた限りではあるが、「恭仁」の用例として、蔡邕「郭有道碑文」（『文選』卷五十八所収）に、

先生誕應天衷，聰睿明哲，孝友溫恭，仁篤慈惠……（先生（郭有道：郭泰<sup>おおい</sup>）誕に天衷に應じ，聰睿にして明哲，孝友にして溫恭，仁篤にして慈惠なり：先生は誠に天意に沿って，聡明で智慧があり，父母に孝で兄弟に優しく，溫和で人にへりくだり，誠実で慈愛にあふれていた）。

とある。ただ、これは「孝友溫恭，仁篤慈惠」の二句にわたっているのも、これに基づいたかは、断定できない。

また、「仁」が「人」に通じているとすると、『詩經』大雅・抑と『詩經』小雅・小宛に、  
溫溫恭人，惟德之基（『詩經』大雅・抑）。

（溫溫たる恭人は、<sup>もとい</sup>惟れ徳の基：溫和で恭敬の人は徳を行なう基となることができる）

溫溫恭人，如集于木（『詩經』小雅・小宛）。

（溫溫たる恭人は、木に<sup>い</sup>集るが如し：溫和で恭敬の人は、木に止まり落ちるのを恐れるように〔禍を免れようと〕する）。

とある。『詩經』では、「恭敬の人」の意味で用いられている。

しかし、憲宗成化帝の景泰帝への否定的な感情を考えれば、きわめて異例ではあるが、諡法に、  
恭仁短折曰哀（恭仁短折を「哀」と曰う）

孔〔晁〕注：恭を體し仁に<sup>ただ</sup>質すも，功 未だ施さざるなり<sup>2)</sup>。

とあるのに基づいたのか、または強いて意識させようとしたのかもしれない。そうすると、「恭仁」は、諡号の「哀」と関わりがあり、孔晁の注によると「恭を體し（恭を基準としてのつとる）」の意味となる。

「康定」も、何に基づいたのかよくわからないが、秦の始皇帝が<sup>えき</sup>「嶧山」（今の山東鄒縣の東南）に行き、秦の徳を頌した<sup>えき</sup>「嶧山刻石」に<sup>3)</sup>、

……<sup>すなわ</sup>廼ち今の皇帝，天下を一家とし，兵 復た起こらず，災害 滅除（滅し除く）され，黔首 康定（人々はやすらかで安定している）し，利澤（利益や恩澤） 長久たり……。

とある。

また、この「康定」は、北宋の仁宗の時の年号に用いられている。ただし、歐陽脩（字は永叔、諡は文忠。吉州廬陵の人。宋・景德四年（一〇〇七）～熙寧五年（一〇七二）。天聖八年（一〇三〇）の進士）は、『歸田錄』で、この年号は、言いがかりをつけたがる者によって「諡なるのみ」とされたと伝える<sup>4)</sup>。

事を好む者<sup>①</sup> 又た曰く、「康定」は乃ち諡なるのみ、と曰う（『歸田錄』卷上：孝思堂藏板・乾隆丙寅重梓『廬陵歐陽文忠公全集』卷一百二十六・集一百二十六・歸田錄卷第一・七葉）。

①好事者：言葉を捏造して問題を起こるのを喜ぶ者。『孟子』萬章上「萬章問曰、謂孔子於衛主癩疽、於

✓ 2) 「諡法解」には、

恭仁短折曰哀〔孔晁注：恭を體し仁に質<sup>ただ</sup>すも、功 未だ施さざるなり〕

とある。陳逢衡の『逸周書補注』（道光五年〔一八二五〕刊）は、つぎのような注釈を加える。

恭仁短折曰哀（恭仁短折を「哀」と曰う）

〔割注〕『漢書』孝哀皇帝の注・『左傳』哀公の釋文・『穀梁』哀公の疏・『論語』の「哀公問曰」の疏に引きて並びに同じ。『獨斷』は「仁」を「人」に作る。

①『漢書』卷十一・哀帝紀第十一・「孝哀皇帝」条の顏師固注に「應劭曰、恭仁短折曰哀」。

②『左傳注疏』卷第五十七・哀公元年・「哀公」条に引く釋文。

③『春秋穀梁注疏』卷第二十・哀公元年・「哀公」条の疏。

④『論語注疏』卷二・爲政・「哀公問曰何為則民服」条の疏。

孔〔晁〕注：恭を體し仁に質<sup>ただ</sup>すも、功 未だ施さざるなり（『逸周書補注』卷十四・三十九葉・「恭仁短折曰哀」条）。

また、潘振『周書解義』（嘉慶十年〔一八〇五〕自序）は、次のような注釈をつける。

恭を體して其の容有り、仁に質して其の徳有り、而れども其の壽無し。是れ哀れむ可きなり（『周書解義』卷六・諡法解第五十四・五十六葉・「恭仁短折曰哀」条）。

✓ 3) 清・李鐸（字は鐵君また眉山・鷹青など。漢軍正黃旗人。奉天鐵嶺の人。康熙二十五年〔一六八六〕～乾隆二十年〔一七五五〕）の『尚史』に、この刻石碑文を掲載する。

其の辭に〔以下のように〕曰く。皇帝 國に立つに、維初の在昔<sup>むかし</sup>、嗣世（帝位を繼承する）して王（秦王）と稱す。亂逆（叛逆）を討伐し、威 四極（四方極遠の地）を動かす（ゆるがせ行き渡らせる）。武義（武事）直方（公正）にして、戎臣（武臣）詔を奉く。世を経めること久しからずして、六つの暴強（凶暴強横）を滅す。〔始皇帝〕二十六年、上（秦始皇帝）高號（尊號）を薦め、孝道 顯明なり。既に泰成を獻じ、乃ち專惠を降す。親から遠方を巡し、嶧山に登る。羣臣の従う者 咸な攸長を思う。亂世を追念するに、土を分ちて邦を建て、以て爭理（争いの発端）を開き、攻戰日々作り、血 野に流る。泰古（上古）より始まり、世々無萬數（きわめて多い）にして、随て五帝に及ぶも、能く禁止する莫し。迺ち今の皇帝（始皇帝）、天下を一家とし、兵 復た起こらず、災害 滅除（滅し除く）され、黔首 康定し、利澤（利益や恩澤）長久たり。羣臣 畧（法度）を誦（暗唱）し、此の樂石を刻し、以て經紀（経緯）を著わす（『尚史』秦本紀附・「始皇帝」条・六葉：乾隆十年（一七四五）自序・乾隆三十八年（一七七三）悅道樓刻本）。

そして、李鐸はこの「嶧山刻石」について、つぎのようなコメントを附している。

史（『史記』）諸々の銘を録するも獨り此の篇<sup>この</sup>を遺す。其の文 稍々諸辭<sup>おと</sup>に遜る。或いは子長（司馬遷）故さらに之を削るか。或いは後の贋作なるか。〔しかし〕今、〔『尚史』秦本〕紀に補入す（『尚史』秦本紀附・「始皇帝」条・六葉：乾隆十年（一七四五）自序・乾隆三十八年（一七七三）悅道樓刻本）。

『史記』には、秦始皇帝のそれぞれ銘文が掲載されているのに、この銘文だけが載せられていない。この銘文は文章がやや劣っている。司馬遷が意図的に削除したのだろうか、または後世の贋作なのだろうか、という。

齊主侍人瘠環，有諸乎」。孟子曰「否，不然也，好事者爲之也・・・（萬章 問いて曰く，「孔子 衛に於いては癯疽<sup>ようしよ</sup>を主とし（腫れ物医者の家に身を寄せる），齊に於いては侍人瘠環<sup>じじんせきかん</sup>を主とす（宦官<sup>せきかん</sup>の瘠環の家に身を寄せる），と。諸れ有りや」と。孟子 曰く，「否，然らざるなり。事を好む者 之を爲すなり）」とあり，朱子の集注に「好事，謂喜造言生事之人也（事を好むとは，言を造りて事を生ずるを喜ぶの人を謂うなり）」。

さらに，南宋末・元初の王應麟（字は伯厚，号は深寧。慶元の人。宋・嘉定十六年〔一二二三〕～元・元貞二年〔一二九六〕）も『玉海』で，「康定」と「靖康」とは，諡法のようにであると述べる。

「康定」と「靖康」は，或ひと謂う，其れ諡法の如し，と（『玉海』卷一・卷十三・律曆・改元・「總論改元」条）。

王世貞（字は元美，号は鳳洲，又の号は弇州山人。江蘇太倉の人。明・嘉靖五年〔一五二六〕～萬曆十八年〔一五九〇〕。嘉靖二十六年丁未科（一五四七）二甲八十名の進士）は，『弇山堂別集』で，明朝で「康定」という諡号を贈られた郡王を列挙し，諡としての「康定」をつぎのように解説する。

#### 康定

郡王秦府永壽王公鋌。成化

右，「令民安樂，純行不爽（民をして安樂せしめ，純行（純正な品德）<sup>たが</sup>爽わず（守るべきところを間違えない）」。

趙府洛川王祐桀・周府益陽王睦楮・代府廣陵王俊楸・晉府義寧王新墀。俱に嘉靖なり

右，俱に「溫良好樂，純行不爽（溫良（溫和善良）好樂（<sup>たが</sup>樂しみを好む）にして，純行爽

- ✓ 4) 歐陽脩は、『歸田錄』において，仁宗の時の「康定」を含めたそれぞれの年号について，つぎのように述べる。
- 仁宗 即位して「天聖」と改元す。時に章獻明肅太后 臨朝稱制（皇帝の職務を代行する）す。議する者〔年〕號を撰する者は，「天」字を文（年号の文字）に取りて「二人」〔というのを組み合わせて「天」とした〕と爲し，以て二人の聖者と爲すと謂いて，太后を悦ばす。〔天聖〕九年に至り「明道」と改元す。又た以て「明」字を文（年号の文字）と爲すは，日月の並べばなり。〔これは，「天」字を分解してた〕「二人」〔としたことと〕と旨 同。無何（間もなく），契丹の諱を犯すを以て明年 遽かに 一に「遂」に作る 改めて「景祐」と曰う。是の時，連歲（連年）天下 大旱あり。改元の詔意あり，以て和氣を迎えんことを冀うなり。五年，郊に因りて又た改元して「寶元」と曰う。景祐の初め，群臣 唐の玄宗の「開元」を以て尊號に加えることを慕い，遂に「景祐」を尊號の上に加えんことを請う。「寶元」に至るも亦た然り。是の歲，趙元昊 河西を以て叛し，元氏に改姓す。朝廷 之を惡み，遽かに改元して「康定」と曰う。而れども復た尊號に加えず。<sup>しか</sup>而して事を好む者 又た曰く，「康定」は乃ち諡なるのみ，と曰う。明年，又た改めて「慶曆」と曰う。九年に至り，大旱あり。河北 尤も甚だし。民の死する者は，十に八九なり。是に於いて又た改元して「皇祐」と曰う。猶お「景祐」がごときなり。六年，日蝕あり。四月朔 正陽の月は，古より忌む所なりと謂うを以て又た改元して「至和」と曰う。三年，仁宗 不豫たり。久之，康復（健康を回復する）し，又た改元して「嘉祐」と曰う。「天聖」より此に至るまで，凡そ年號<sup>ごご</sup> 九つなり。皆な謂う有るなり（『歸田錄』卷上：孝思堂藏板・乾隆丙寅重梓『廬陵歐陽文忠公全集』卷一百二十六・集一百二十六・歸田錄卷第一・七葉）。

わず)」（『弇山堂別集』卷七十三・諡法四・二字諡・「康定」条）。

王世貞は、「康定」を、

「人々を平穩無事とし、純正な品德を守り通す」

「温和善良で楽しみを好み、純正な品德を守り通す」

と解釈する。何もコメントがないので、王世貞は、「康定」を諡としては、特に不都合な語句ではないと理解しているようである。

このように、「恭人」は、諡法の「恭仁短折曰哀（恭仁短折を「哀」と曰う）」を意識させる語句の可能性があった。また、「康定」は否定的な意味を持つものでないものの、宋代に「諡号」のようであると難癖をつけられたという背景を持つ語句であった。

## ②「景」字とその用例

「景」字は、「諡法解」によるとつぎのようである。

由義而濟曰景（義に由りて濟すを「景」と曰う）〔孔晁注：義を用いて成るなり〕。

耆意大慮曰景（耆（強）き意もて大いに圖るを「景」と曰う）〔孔晁注：耆は、強きなり〕。

布義行剛曰景（義を布きて剛を行なうを「景」と曰う）〔孔晁注：剛を以て義を行なうなり〕。

『逸周書』諡法は、「耆意大慮曰景」と「布義行剛曰景」との順序が逆になっている。陳逢衡の『逸周書補注』（道光五年〔一八二五〕刊）は、つぎのような注釈を加える。

由義而濟曰景（義に由りて濟すを「景」と曰う）

孔〔晁〕注：義を用いて成るなり。

補注：「景」に正大（公正無私）顯鑠（あきらかでうるわしい）の義有り。周王貴「景王」と諡す（『逸周書補注』卷十四・二十三葉・「由義而濟曰景」条）。

①周の靈王の子。魯昭公二十二年四月に心疾で崩ずる。

布義行剛曰景（義を布きて剛を行なうを「景」と曰う）〔漢書〕霍去病傳の張晏注も同じ

孔〔晁〕注：剛を以て義を行なうなり。

補注：『春秋考異郵』に曰く、「景者、強也（景とは強なり）」、『魏書』羊祉傳に「太常少卿の元端・博士の劉臺龍 諡を議して曰く、〔羊〕祉 志は埋輪（権力者を畏れず、直言する）に存し、疆（強）禦（權勢の人）を避けず。戎律（軍務）を贊けるに及び、熊武（勇猛な將士）も斯れ裁ち、伏（仗）節（天子の代理となる）もて撫藩（安撫して保護する）す。邊夷（辺境の少数民族）も徳を識り、殊俗（殊類：風俗の異なった遠方）も化沾（感化）し、襁負（背負われている子供）も仁に懷けり。謹しみて諡法に依るに、「布德行剛曰景（徳を布きて剛を行なうを「景」と曰う）」、宜しく諡して「景」と爲すべし、と。『北史』羊祉傳も同じ（『逸周書補注』卷十四・二十三葉～二十

四葉・「布義行剛曰景」条)。

朱右曾は、『逸周書集訓校釋』(道光二十六年〔一八四六〕序)において、

景は、強なり、大なり。義を用いて成り、能く自ら強きなり。義を布きて剛を行ない、剛きを以て義を行なうなり。耆は、強なり(『逸周書集訓校釋』六・諡法第五十四・「由義而濟曰景・布義行剛曰景・耆意大慮曰景」条)。

と注釈する。

潘振の『周書解義』(嘉慶十年〔一八〇五〕自序)は、

景は、光なり、大なり。義を用いて事を成し、治道 光大なり(『周書解義』卷六・諡法解第五十四・五十六葉・「由義而濟曰景」条)。

義 外に施す、故に「布」と曰う。剛 内に出る、故に「行」と曰う。義を布きて剛を行ない、性體(本性・氣質)光大なり(『周書解義』卷六・諡法解第五十四・五十六葉・「布義行剛曰景」条)。

其の心意を疆くし、懦弱を鄰とせず。其の謀慮を大にし、細微に涉らず、志願 光大なり(『周書解義』卷六・諡法解第五十四・五十六葉・「耆意大慮曰景」条)。

と注釈する。

北宋の蘇洵の「諡法」は、「由義而濟曰景」を除いた二条を採用する。

#### 景二

耆意大圖曰景(耆(強)き意もて大いに圖るを「景」と曰う)。

布義行剛曰景(義を布きて剛を行なうを「景」と曰う)。

なお、『通志』諡略において、「景」字は「上諡法」の百三十一字の一字に分類される。

右、百三十一の諡は、之を君親に用う、[また] 之を君子に用う(『通志』卷四十六・諡略第一・諡中)。

君主や君子に用いる文字であると考えられている。

景泰帝に「景」という諡号が贈られてから後の人になるが、王世貞は『弇山堂別集』において、景泰帝の諡号の意味を、

#### 景

景皇帝、帝の諡なり。宣宗(宣德帝・章皇帝)の次子。「諡法」に、「耆(強)き意もて大いに圖る(耆意大圖)」・「義を布きて剛を行なう(布義行剛)」を「景」と曰う(『弇山堂別集』卷七十・諡法一・「景」条)。

と説明する。

これらのことからすると、「景」字には、「義にしたがって執り行う」・「強い意志で事を行なう」・「義にしたがって剛(強力な事)を行なう」などの意味があったと考えられてきたといえる。

では、用例はどうであろうか。管見の及ぶところ、皇帝として「景」と諡されたのは<sup>5)</sup>、漢



景帝がいる。また、三国呉の帝号を称した孫權から数えて三代目にあたる孫休（字は子烈）にも「景」字が贈られている<sup>6)</sup>。

他には、実際に皇帝にはなっていないものの晉の司馬師（武帝司馬炎の伯父）や唐の皇祖が、

- ✓ 5) 皇帝の称号が使われる前の春秋の時に、周の景王貴（周靈王の子。魯昭公二十二年四月に崩ずる）が「景」と諡されている。

周の景王は、『春秋』昭公二十二年・經文に、

〔昭公二十二年〕夏。四月。乙丑。天王（周の景王）崩。

六月、叔鞅如京師。葬景王。王室亂。

と記されるように、亡くなると、周の王室が乱れたという。

『史記』周本紀には、

景王貴 立つ。景王十八年、后・太子聖而蚤に卒す。二十年、景王 子朝（景王の長庶子）を愛し、之を立てんと欲す。會たま崩ず。〔景王の〕子の丐の黨と〔子朝の黨と〕立つを争う。國人 長子猛を立てて王と爲す。子朝 攻めて猛を殺す。猛 悼王爲り。晉人 子朝を攻め丐を立て、是れ敬王（猛の母弟）爲り。敬王元年、晉人 敬王を〔周に〕入れんとす。子朝自から立てば、敬王 入るを得ず。澤に居る。四年、晉 率諸侯を率いて敬王を周に入る。子朝 臣と爲る。諸侯 周に城つくる。十六年、子朝の徒復た亂を作し、敬王 晉に犇ぐ。十七年、晉の定公 遂に敬王を周に入る……四十二年、敬王崩じ、子の元王仁 立つ。元王八年、崩じ、子の定王介 立つ……（『史記』周本紀）。

とある。「王室 亂る」ようになったのは、庶子の子朝を愛したために、王位継承をこじれさせたことによる、と伝える。

なお、宋の胡安國（字は康侯、諡は文定。福建崇安の人。北宋・熙寧七年（一〇七四）～南宋・紹興八年（一一三八）。紹聖四年（一〇九七）の進士）は、『春秋胡氏傳』において、この「王室 亂る」をつぎのように解釈する。

何をか「王室 亂る」と言うか。王者 天下を以て家と爲せば、則ち京師を以て室と爲す。京師とは、本なり。周公「立政」（『書經』立政）を作りて曰く、「迪 惟れ有夏、乃ち室（王室）大競なる有り」と。其れ「鵲鵲」の詩（『詩經』國風・邶）を作りて成王に遣り、亦た曰く、「既に我が子を取る、我が室を毀つこと無かれ」と。皆な京師を指して之を言うなり。京師を以て室と爲し、王畿もて堂と爲し、諸夏もて庭戸と爲し、四夷もて藩離と爲せば、外を治むる者は、先ず内よりし、遠きを治むる者は先ず近きよりす。「本亂れて末治むる者は、否ず」（『大學』經第七節）。景王 子朝を寵愛し、孽子（庶子）をして配嫡（庶子の地位を嫡子と同等にする）せしめるは、本を以て亂す者なり。其の「王室」と言うは、國本（跡継ぎ）の正しからざるを議ればなり。本正しくして天下定まれり……（『春秋胡氏傳』卷第二十六・昭公下・「〔昭公二十二年〕六月、叔鞅如京師。葬景王。王室亂」条）。

なぜ「王室 亂る」と言うのか。それは以下のような理由からである。王者は、天下を家としているので、その居住している都（京師）を部屋（室）とする。都（京師）とは、本である。周公は、「立政」を作って「道が行なわれたのは、夏の禹の時である。その頃、王室はたいへん盛んであった」といった。『詩經』の鵲鵲で周公は、「既に我が子を取る、我が室を毀つこと無かれ」と言った。ここで言う「室」は、都（京師）を指している。都（京師）を部屋（室）とし、王畿を「堂」とし、諸夏を「庭戸」とし、四夷を「藩離」とするのであるから、外を治めるには内側より行ない、遠方を治めるには近いところから行なう。「根本が乱れて、末端が治まっているようなものはありえない」。周の景王が、庶子の子朝をかわいがり、庶子を嫡子と同等の地位に置いたのは、本を乱すものである。『春秋』の經文で「王室」と言っているのは、跡継ぎ（國本）に問題があることを批判している。本が正しくて、天下が治まるのである、という。

周の景王が、庶子の子朝をかわいがり、庶子を嫡子と同等の地位に置いたのは、本を乱すものである、と批判するのである。憶測ではあるが、このことと景泰帝に贈られた「景」字と関連があるかもしれない。なぜなら、景泰帝は、自分の子供に皇位を継承させようとして、皇太子であった憲宗成化帝を退位させたからである。

いわゆる天子の七廟を整えるための処置として「景皇帝」と追贈されている。五胡十國の時代には、前趙の劉曜が高祖の劉亮に光初元年（三一八年）に「景皇帝」と追贈し、夏（五胡十國）の赫連勃勃が曾祖の武に真興元年（四一九年）に「景皇帝」と追贈する。南朝の南齊では、傍系から帝位についた明帝が実父の蕭道生に「景皇帝」を追贈している。

さらに、五代の呉国の二代目の楊渥（楊行密の長子：在位天祐二年〔九〇五〕～五年〔九〇八〕）が武義年間（九一九年～九二〇年）に「景王」と追贈され（最初は「威王」と諡される）、乾貞元年（九二七）に「景皇帝」と追贈されている。

すると、正統王朝の皇帝としての実際の事績に対して「景」と諡されたのは、漢の景帝のみであった、と言えるのではないだろうか（『資治通鑑綱目』の正統観からすると、三国呉の景帝は正統な皇帝とは認められていない）。では、この漢の景帝は、宋代・明代ではどのように評価されていたのか。続けて検討してみたい。

## (2) 漢景帝について

司馬光（字は君實、晩年に迂夫もしくは迂叟と号す。諡は文正。陝西夏縣涑水<sup>そくすい</sup>の人。宋・天禧三年（一〇一九）～元祐元年（一〇八六）。寶元元年（一〇三八）の進士）の『資治通鑑』は、漢景帝の評価として、漢紀八・「孝景皇帝下」の末尾に司馬光自身の文章ではないが、『漢書』景帝紀・論贊と『史記』平準書（『漢書』食貨志）の記述を引用する。

その引用する班固（字は孟堅。漢建武八年〔三十二〕～永元四年〔九十二〕）の『漢書』景帝紀・論贊には、つぎのようにある。

班固の贊に〔以下のように〕曰く。孔子 稱すらく「斯の民や、三代の直道にして行なう所以なり」<sup>①</sup>（『論語』衛靈公）と。信なるかな。周・秦の敝は、罔密文峻（法網が緻密で峻烈）なれども、姦軌（不正を行なう者）<sup>あ</sup>勝げられず<sup>②</sup>。漢 興り、煩苛を埽除し、民と休息す。孝文〔帝〕に至り、之に加えるに恭儉を以てし、孝景〔帝〕は業に<sup>したが</sup>違ふ。五六十載の

✓ 6) 「景」字が贈られた孫休について、『三國志』の編者の陳壽（字は承祚。巴西郡安漢縣（四川南充）の人。建興十一年〔二三三〕～晉・元康七年〔二九七〕）は、つぎのようにいう。

評に〔以下のように〕曰く。・・・〔孫〕休 舊愛宿恩を以て、〔濮〕用興・〔張〕布を任じ、良才を拔進して改絃易張（琴の弦を張り替える。制度などを根本的に改める）する能わず。<sup>こころざし</sup>志 善く好學なりと雖も、何ぞ亂を救うに益あらんや。又た既に廢されるの〔孫〕亮をして其の死を得ざらしめるは、「友于<sup>①</sup>（兄弟の意）」の義に<sup>うす</sup>薄し・・・（『三國志』卷四十八・呉書三・三嗣主傳第三）。

①『書經』君陳に「惟孝。友于兄弟。克施有政（惟れ孝なれば、兄弟に友に、<sup>く</sup>克く有政に施す）」とあり、『論語』爲政に「・・・子曰、書云孝乎、惟孝友于兄弟、施於有政（子曰く、書に云う、孝か、惟れ孝、兄弟に友に、有政に施す）・・・」。

強いて景泰帝に贈られた「景」字との関連を挙げるならば、批判のひとつに挙げられている「友于（兄弟の意）の義に<sup>うす</sup>薄し」ということであろうか。というのも、景泰帝は、帰還した兄の英宗に帝位を返還せず、宮中で幽閉したからである。



間、移風易俗<sup>③</sup>に至り、黎民は醇厚<sup>④</sup>なり。[そうしたことから]周は成[王]・康[王]と云い、漢は文[帝]・景[帝]と言う。美しきかな（『資治通鑑』巻第十六・漢紀八・孝景皇帝下）<sup>7)</sup>。

①顔師古 曰く、此れ『論語』に載せる孔子の辭なり。言うところは、此れ今の時の人は、亦た夏・殷・周の馭する所なり。政化淳壹なるを以て、故に能く「直道にして行なう」。今の然らざるを傷む。

②顔師古 曰く、勝ぐ可からず。

③『禮記』樂記に「移風易俗、天下皆寧（風を移し俗を易えて、天下皆な寧し）」。

④顔師古 曰く、黎は、衆なり。醇は、澆雜ならず。

⑤『史記』周本紀に「成[王]・康[王]、天下 安寧にして、刑 錯<sup>⑥</sup>（捨て置く）され四十餘年用いられず」。

@『史記』の「集解」は、この「錯」字に対して「應劭 曰く、錯とは、置くなり。民 法を犯さず、刑を置く所無し」と注釈する。

班固の景帝紀の賛につぎのようにいう。孔子は「この民は夏・殷・周三代にわたり、直（心をゆがめず、善は善とし悪は悪とする）の道（行動）をもって治めたものである」と言った（『論語』衛靈公）。まことにその通りである。周末・秦の欠点は、法網が密で法文はきびしかったものの、不正を行なう者を摘発しきれなかった。漢が興り、煩雜・苛酷な法を一掃して人びとに

#### 7) 『史記』孝景帝本紀・論贊では、つぎのようにいう。

太史公 曰く、漢 興り、孝文（文帝）大徳を施し、天下 懷安（案じて業を楽しむ）す。孝景（景帝）に至り、復た異姓〔の諸侯〕を憂えず。而れども晁錯〔王室の〕諸侯を刻削し、遂に七國をして俱に起きて、合従して西に郷わしむ。諸侯の太はだ盛なるを以て、〔晁〕錯 之が爲に漸を以てせざればなり。主父偃の之を言い、諸侯の以て弱きに及び、卒に以て安んず。安危の機は、豈に謀を以てせざらんや（『史記』孝景帝本紀・論贊）。

漢が興り、景帝の前代の文帝が大いに徳を施したので、天下は分に安んじてその業を楽しんだ。景帝になってからは、異姓の諸侯は〔ほとんどが取り潰されたため〕憂慮することはなくなった。しかし晁錯が〔王室の〕諸侯の領土を削ったので、とうとう王族の七國が蜂起・連合して軍勢を西にある都に進める事態になった。これは、王族の勢いが盛んであるのに、晁錯が〔王室諸侯の力を〕徐々に削減しようとしなかったためである。主父偃の献策（王室諸侯の領土を分割相続させる）によって勢いは弱くなり、ようやく安らくなった。天下の安危の機微は、計略のよしあしによるのではないだろうか、という。

この『史記』孝景帝本紀の論贊では、景帝その人についての評価はなされていないように見える。なお、「孝景帝本紀」に関して、『史記』太史公自序の「太史公曰、余述歴黃帝以來至太初而訖、百三十篇」条の「索隱」につぎのようにいう。

案ずるに、『漢書』に「十篇 録有りて書無し<sup>①</sup>」と曰う。張晏（字は子博。中山の人：顔師固「前漢書敘例」による）曰く「〔司馬〕遷 没するの後、景紀（「孝景帝本紀」）・武紀（「孝武帝本紀」）・禮書・樂書・兵書・將相表・三王世家と「日者〔列傳〕」・龜策〔列傳〕・傅靳〔列傳〕等の列傳は亡ぶ」と。案ずるに、「景紀（「孝景帝本紀」）」は、班〔固〕の書（『漢書』）を取りて之を補う……（『史記』太史公自序・「太史公曰、余述歴黃帝以來至太初而訖、百三十篇」条の「索隱」）。

①『漢書』藝文志「太史公百三十篇」条の顔師固の注。

「索隱」によれば、「孝景帝本紀」は散逸してしまったので、班固の『漢書』を使って補ったというのである。

『資治通鑑考異』に言及がなく、たんなる推測にすぎないが、このことも『資治通鑑』が『史記』の論贊を引用しなかった理由のひとつかもしれない。

安らぎをあたえた。文帝に至って、さらに恭順・節儉を加え、景帝はこれを遵守し、五、六十  
年の間に、風俗を改め、民衆は淳朴で人情は厚くなった。そうしたことから、周代においては  
成王・康王を讃え、漢代においては文帝・景帝を讃える。立派なことではないか、という。

班固は、周の成王・康王に匹敵する皇帝として漢文帝・漢景帝をたたえるのである。

『資治通鑑』は、この班固の論贊を引き、さらに『史記』平準書（『漢書』食貨志）からつぎ  
の条を引用する。

漢 興り、秦の弊に接し、作業 劇しく、財 匱し、天子より鈞駟（四頭ともに同じ色の  
馬）を具うる能わず、而して將 [軍]・[宰] 相 或いは牛車に乗る。齊民（平民） 藏蓋  
（儲藏）無し。天下 已に平らぎ、高祖 乃ち賈人をして絲（絹）を衣ると車に乗るとを得  
ざらしめ、租税を重くし以て之を困辱す。孝惠 [帝]・高后（高太后）の時、天下 初めて  
定まらるるが爲に、復た商賈の律を弛む。然れども市井（商賈を指す）の子孫は、亦た仕宦し  
て吏と爲るを得ず。吏祿（役人の俸給）を量り、官用（官府の費用）を度り、以て民に賦  
す。而して山川・園池・市井の租税の入るるは、天子より以て封君の湯沐の邑（諸王侯の  
封邑）に至るまで、皆な各々私の奉養と爲し、天子の經費に領めず。山東の粟を漕轉（運  
搬）して以て中都の官（京師の諸々の官府）に給するも、歳に數十萬石に過ぎず。繼ぎて  
孝文・孝景を以てし、清淨恭儉もて、天下を安養し、七十餘年の間、國家 事無し、水旱  
の災に遇うに非ざれば、民は則ち人給家足す。都鄙の廩庾（糧倉）皆な満ち、府庫 貨財  
を餘す。京師の錢 鉅萬を累ね、貫 朽ちて、校う可からず、太倉の粟 陳陳として相い  
因り（穀物が積み重なったままになること）、充溢（充滿）して外に露積（露天積み）し、  
腐敗するに至り食す可からず。衆庶 街巷に馬有り、阡陌の間に羣を成す。字牝（牝馬）  
に乗る者は、擯けられて聚會するを得ず。閭閻（門）に守する者は梁（あわ）肉（梁を飯  
として肉を肴とする。美味しい食膳を指す）を食し、吏と爲る者は子孫を長す、官に居る  
者は以て姓の號と爲す（たとえば、倉氏・庾氏など）。故に人人 自愛し法を犯すを重ん  
じ、義を行なうを先にし、詘辱（屈辱）を後にす。此の時に當り、罔 疏にして、民 富  
み、役財 驕溢（驕って満ち足りる）し、或いは兼并・豪黨の徒に至るまで、以て郷曲に  
武斷す。宗室の土有るもの・公・卿・大夫以て下は、奢侈を争い、室廬・輿服は上に倣え、  
限度無し。物 盛んなれば衰うは、固より其の變なり。是れより後、孝武 内に侈靡を窮  
め、外に夷狄を攘い、天下 蕭然として、財力 耗ゆ（『資治通鑑』卷第十六・漢紀八・孝  
景皇帝下）。

漢が興った際には、秦の悪政の後を受けて、なすべき仕事は多端で財貨も乏しく、天子は車馬  
の色を揃えることができず、將軍や宰相は牛車に乗る者もあり、民衆には貯えがなかった。天  
下が平定されると、高祖は商人に絹物を着ることと車に乗ることを禁じ、租税を重くして彼ら  
を苦しめはうかつめた。恵帝及び高后の時には、天下がやっと治まったので、ふたたび商人へ  
の禁令を弛めた。しかしながら商人の子孫は、依然として仕官して役人になることはできなかつ

た。役人の俸禄を計上し、役所の費用を見積もり、人民に課税した。そうして山・川や園・池の物産や商人の租税の収入は、天子から諸王侯の封邑に至るまで、すべて私人としての賄いに取り、天子の国政の経費には入れなかった。山東地方の穀物を運んで都の官府に供給するものも、年に数十万石を越えなかった。これに次いで、文帝・景帝が清廉潔白・恭順・節儉をもって天下を安らげ養い、七十余年の間天下諸国は事変もなく、大水や日照りの災害さえなければ、人民はどの家でも物資が十分で都市も農村も、米倉は一杯になり金倉は金銭物資が溢れた。都の銭は巨万を重ね、それを通す紐はぼろぼろに朽ちて数えることができないほどであった。都の米倉は穀物が積み重なったままになり、溢れたものは屋外に露天積みにされ、腐って食べることができないほどになった。庶民は街で馬を乗り廻し、田畑にも馬が群れをなし、牝馬に乗った者はのけ者にされて、仲間入りできず、門番も美食を食べ、役人は子孫の養育に手がまわり、官署にいる者は、それを姓に名乗るほどであった（たとえば、倉氏・庾氏など）。それゆえ人びとは、自重して法を犯すことを慎み、道を行なうことに心がけ、屈辱を受けることを避けた。こうした時に、法網はゆるく、人民は裕福になり、物を浪費して贅沢に奢り、また、土地を兼併したり、多数の徒党を組んだ輩が地方にかけてな振舞をするようにもなり、封邑を受けた宗室や公・卿・大夫などの大官以下の役人たちは奢侈を競い、住居・乗り物・衣服などは長上の者をのり越えて、限度がないほどになった。物事は盛んになると必ず衰えるのが、変化本来の法則である。これより以後、武帝は、内は奢りをさわめ、外は夷狄を討ち払って、天下はひっそりとし、財力はついていった、という。

このように周の成王・康王とならび称えられたとする班固の論賛と、「法網はゆるく、人民は裕福になり、物を浪費して贅沢に奢り、また、土地を兼併したり、多数の徒党を組んだ輩が地方にかけてな振舞をするようにもなった」というものの文帝・景帝の時代には世の中が豊かになったという『史記』平準書（『漢書』食貨志）の記述を引用していることからすると、『資治通鑑』は漢の景帝に対して一定のよい評価を与えていると考えられる。

ところが『資治通鑑綱目』は、以上の『資治通鑑』の記述を引用をした後、胡寅（字は明仲、先の字は仲虎、又の字は仲剛、号は致堂。致堂先生・衡麓先生・衡楚先生と称される。福建崇安縣の人。北宋・元符元年（一〇九八）～南宋・紹興二十六年（一一五六）。胡安國の長子）の『致堂讀史管見』（卷第二・孝景・漢紀・「帝崩」条）で胡寅が「竊かに以爲らく」とする以下の意見を付け加える。

文〔帝〕・景〔帝〕は民を養<sup>①</sup>うこと厚し。諸を仲尼の言に稽<sup>かんが</sup>うるに、則ち亦た之を富庶<sup>②</sup>にするのみ。未だ以て之を教（教育）うること有らざるなり。然れども文帝は寛厚の長者なり。徳を以て人を化す。事無ければ、則ち謙抑（謙遜）して能わざるが如くす。事有れば、則ち英氣 奮發す。景帝は刻薄（冷酷無情）・任數（權謀を用いる）にして、詐力（恐喝や暴力）を以て下を御す。平居は則ち誅賞（賞罰）<sup>ほしいまま</sup>肆に行ない、緩急（差し迫った状況）には則ち惴慄<sup>ずいりつ</sup>（恐れて戦慄する）して失措（恐れて常態を失う）す。其の大致（基本的）の懸

絶（大きな違い）すること此の如し。而して〔景帝は〕又た寵（いつくしむ）無くして正后を廢し、夫婦の道 薄し。罪無きを以て太子を廢し、父子の恩 睽けり。梁王を過愛し、輕がろしく位を傳うるを許し、兄弟の好 終えず。讒を信じ譖を用い、申屠嘉を絀け、鼂錯を戮し、周亞父を殺し、君臣の道 乖缺す。其れ文帝に視<sup>くら</sup>べるに益々相い<sup>はる</sup>違かなり。獨り節儉（節約）愛民の一事は、克く前業に遵うのみ。夫れ豈に成〔王〕・康〔王〕と同じく美稱を得んや（成化刻『資治通鑑綱目』第四・「孝景皇帝」条・十二葉～十三葉）<sup>8)</sup>。

①『書經』大禹謨に「禹曰、於、帝念哉。德惟善政、政在養民・・・・（禹 曰く、於、帝念え。德は惟れ政を善くす、政は民を養うに在り）」。

②『論語』子路に、「冉有曰、既庶矣、又何加焉。曰、富之（冉有 曰く、既に〔人口が〕<sup>おほ</sup>庶きなり。又た何をか加えん、と。曰く、之を富まさん、と）」。

③梁王武は、景帝と同じ竇皇后の子である。『漢書』文三王傳によれば、「是時、上（景帝）未置太子、與孝王宴飲、從容言曰、「千秋萬歲後傳於王」。王辭謝。雖知非至言、然心內喜。太后亦然（是時（景帝が即位した直後）、上（景帝）未だ太子を置かず。孝王（梁王武）と宴飲し、從容として言いて曰く、「千秋

- 8) 憲宗成化帝の次の孝宗弘治帝の時代の宮中では、『資治通鑑綱目』は読まれたものの、胡寅については、ほとんど知られていなかったようだ。沈德符の『萬曆野獲編』はつぎのように伝える。

【致堂胡氏】胡致堂 名は寅、字は明仲、〔『春秋胡氏傳』などで著名な〕胡安國の長子爲り。垂髫の孺子（おさげ髪の子供）と雖も亦た之を知る。孝宗 一日宮中に在りて〔『資治』通鑑綱目〕を閱むに、致堂胡氏（胡寅）の斷語有り。〔しかし〕未だ其の人を知らず。因りて御札を出し内閣に付し、其の本末（委細）を問う。時に洛陽の劉文靖（劉健）諸公 閣に在り。俱に茫然として失對（回答が出せない）たり。遂に〔回答できないことを〕直陳（隠し立てせず）に伝えるし以て謝す。閣を出るに比びて、故籍を翻閱し始めて之を得て、具さに掲して以て復す。且つ寡學を以て引愆す。上（孝宗弘治帝）も亦た罪せざるなり。是の時、李長沙（李東陽）次相爲り。博雅を以て稱せらる。豈に此れを嫻にせざらんや。或いは恐くは劉の護前（過失をかばう）し、故に韜晦して拙なるを示すか。胡〔寅〕の著わす所の『讀史管見』等の書は。初めより秘冊に非ず。想うに劉〔健〕亦た未だ嘗て〔『讀史管見』を〕寓目せず。宜ど邱仲深（邱濬：字は仲深）の其の一屋の串子を笑いて、却って散錢無き〔がごとき〕なり。其の後、馬端肅（馬文升）<sup>③</sup>「宰相は須らく讀書人を用うべし」の語有り。蓋し亦た「正德」の年號の一事に止まらざるなり（『萬曆野獲編』補遺卷二・内閣・「致堂胡氏」条）。

①劉健：名は健、字は希賢、号は晦菴、諡は文靖。河南洛陽の人。宣德元年（1433）～嘉靖五年（1526）。天順四年庚辰科（一四六〇）二甲三十九名の進士。

②李東陽：字は賓之、号は西涯、諡は文正。湖廣茶陵の人。正統十二年（一四四七）～正德十一年（一五一六）。天順八年甲申科（一四六四）の二甲一名の進士。

③馬文升：字は負圖、号は三峯居士、諡は端肅。河南鈞州の人。宣德元年（一四二六）～正德五年（一五一〇）。景泰二年辛未科（一四五二）三甲一百七名の進士。

④『萬曆野獲編』に「正德の改元は、實に西夏の李乾順の故號を誤襲す。時に馬端肅（馬文升）銓（銓考）を乗るに試題を出し、以て政府の不學を嘲う。劉晦菴（劉健）、李西涯（李東陽）、謝木齋（謝遷：字は于喬、号は木齋、諡は文正。浙江餘姚の人。景泰元年（一四四九??）～嘉靖三年（一五三一）。成化十一年（一四七五）乙未科の狀元）の三公 揆地（宰相の地位）に在り。世 傳えて笑端（笑い話）と爲す」（『萬曆野獲編』卷十五・科場・「出題有他意」条）。

⑤『萬曆野獲編』に「鈞陽（馬文升）銓試（試験）するに、「宰相須用讀書人」の論題を出し、以て洛陽（劉健）の不學を譏る」（『萬曆野獲編』卷七・内閣・「閣部形跡」条）。

萬歳の後、[帝位を]王（梁王武）に傳えん」と。王（梁王武） 辭謝す。至言（心からのことば）に非ずを知ると雖も、然れども心内 喜ぶ。[竇]太后も亦た然り」。

漢の文帝・景帝は、民の生活を豊かに養った。このことを孔子の発言に考えてみると、富庶（人口が多くなり、豊かになる）ということになる。また、これは教えてできることではない。しかしながら、文帝は寛大で手厚い長者である。徳でもって人々を教化した。何事もなければ、謙遜してできないようなふりをした。何事かあれば、優れた気質を発揮した。景帝は冷酷無情で権謀を用い、脅しや権力で臣下を統御した。ふだんは賞罰を好き勝手に行ない、差し迫った事態になると恐れおののき、どうしていいのか分からなくなる。その基本的な相違点は、このようなものである。そのうえ、景帝は、いつくしむこともなく皇后を廃位して、夫婦の道徳を軽んじた。罪もない太子を廃位し、父子の恩愛から離れた。梁王に愛情をそそぎ、軽々しく帝位の継承を口にだしたが、後に不和となり兄弟の睦まじさを終えることはできなかった。讒言を信じて、いつわりを用いて申屠嘉をしりぞけ、鼂錯を処刑し、周亞父を殺して、君臣の道徳は乖離して壊れていった。これを文帝に比較するは遠く隔たっている。ただし、その節約と民をいつくしんだことは、じゅうぶんに文帝を受け継いでいる。だが、どうして、周の成王・康王と同じくすばらしい評価をうけることができるのか、という。

胡寅は、「夫れ豈に成[王]・康[王]と同じく美稱を得んや」といい班固の論贊の評価を批判し、漢景帝に対してかなり手厳しい評価を下しているのである。

『資治通鑑綱目』は、わざわざ『資治通鑑』を引用し、そのうしろにそれに対して否定的な胡寅の意見を付け加える。それは、班固の論贊・『史記』平準書（『漢書』食貨志）にしたがった『資治通鑑』の評価に対して、ことさら異を唱えるためであったといえるのではないだろうか。ちなみに、胡寅は、漢景帝が皇后・太子を廃位したことや皇位継承・兄弟間などで問題を起こしたことを指摘しているが、これは明・景泰帝が行なったことと重なっている。

では、明王朝では、漢景帝をどのような皇帝と見ていたのであろうか。永樂帝（元・至正二十年〔一三六〇〕～明・永樂二十二年〔一四二四〕）勅撰の『性理大全』（永樂十三年（一四一五）序）は、「五峰胡氏曰」として、胡宏（字は仁仲。五峰先生と称される。福建崇安の人。北宋・崇寧四年〔一一〇五〕？～南宋・紹興三十一年〔一一六一〕？。胡安國の子）の漢景帝に対する評価を引用する。

五峰胡氏 曰く、漢の景[帝]<sup>しつと</sup> 鄧都・寧成を以て中尉と爲し、嚴酷を以て宗室・貴戚を治む。[そのため] 人人 惴恐す。夫れ親親尊尊の道は、必ず天下の節行賢徳の人を選び、之が師傅と爲し、之が交遊を爲す。則ち大人君子の天下の用と爲す可きもの有れば、何ぞ其の法を犯すを憂うること有らんや。百姓を治むること亦た然り。學校を修崇するは、教うる所以なり。刑は以て教えを助けるのみ。治を爲すの正法に非ざるなり（『性理大全』卷之六十・歷代二・西漢・「景泰」条）。

胡五峰（胡宏）は、つぎのように述べる、漢の景帝は、[酷吏である]<sup>しつと</sup> 鄧都・寧成を中尉（警視



総監：九卿のひとつ）に任命し、冷酷に宗室（皇族）・貴戚（皇族親族）を取り締まった。[そのため] 人々は恐れおののいた。そもそも親親尊尊の道（親密な人に親しくし、尊貴な人を尊ぶという人間の情け）は、必ず天下の節行賢徳の人を選んで、師となしたり交遊したりして行なうものである。天下のために有用となるべき大人や君子がいれば、どうして人々が法を犯すことを憂えたりすることがあるだろうか。人々を統治することも同じである。学校を起こしたりとうとぶのは、このことを教えるからである。刑というものは、この教えを補助するだけである。統治の正しい方法ではない、という。

漢景帝は、酷吏である鄧都・寧成を中尉（警視総監：九卿のひとつ）に任命し、冷酷に宗室（皇族）・貴戚（皇族親族）を取り締まったという。つまり漢景帝の統治方法を批判しているように理解できる。

この意見が、永樂帝勅撰の『性理大全』に掲載されていることは、明朝における公式の漢景帝に対する評価と考えていいと思う。

さらに言うと、永樂帝自身が反乱を起こして帝位についた（靖難の役）ことから、自分が打倒した建文帝を漢景帝（王族をしきりに取り潰したために呉楚七国の乱を引き起こすことになる）になぞらえているであろうことも影響しているのかもしれない。

では、続けて憲宗成化帝と漢景帝に批判的な『資治通鑑綱目』との関係を検討してみたい。

### (3) 憲宗成化帝と『資治通鑑綱目』

成化九年二月十六日に『資治通鑑綱目』の定本編纂が終了し、それが奉られる。憲宗成化帝が、景泰帝の帝號復活を命じる二年ほど前のことである。憲宗成化帝が序文で「考訂・上呈 具さに朕（憲宗成化帝）の意の如し」と書いていることからすると、『資治通鑑綱目』の校訂・出版は憲宗成化帝の意志によるものであった。

では、憲宗成化帝は、『資治通鑑綱目』をどのような書物であると考えていたのであろうか。憲宗成化帝は、その序文でつぎのようにいう。

〔成化九年二月〕丁丑（十六日）、是れより先、上（憲宗成化帝）儒臣に命じて宋儒朱熹の『資治通鑑綱目』を考訂させ、盡く後儒の著わす所の「考異」・「考證」の諸書を去り、而して王逢の『集覽』・尹起莘の『發明』を以て其の後に附す。是に至り上呈す。上（憲宗成化帝）刻梓し以て傳うるをを命じ、親から序を卷首に制りて曰く、朕（憲宗成化帝）惟うに朱子の『資治通鑑綱目』は、實に『春秋』經傳の體を備え、天理を明らかにし、人倫を正す。善を褒め惡を貶め、詞 嚴にして義 精なり。其の天下後世に功有ること大なり。顧だ傳刻（転々と版木に伝えうつして刻する）歳久しく、間に缺訛有り。甚だしくは書法と著わす所の「凡例」・「提要」と或いは同じからざるもの有るに至る。是を以て後人 焉を疑い、「考異」・「考證」の作有りて、兩つながら其の説を存し、終に能く定むる莫し。朕



(憲宗成化帝)嘗て深く其の故を求む。盖し「凡例」・「提要」は乃ち朱子の親から筆し以て門人に授け、之に據らしめ、以て書を成す。書 既に成るに及び、再び加筆し、削り、則ち事に随いて文を立つ。[そのため]時に小異有り、而して大體は終に勸懲<sup>①</sup>の外に出でず。豈に一一疑を其の間に致す可けんや。昔者<sup>むかし</sup>、五經の同異は、漢の宣帝の命に頼りて、諸儒石渠閣に講論し、親から稱制(詔勅のひとつ。三公と尚書が副書して、州縣に頒布するのに用いる)して臨決(みづから決裁する)<sup>②</sup>す。然る後に「五經の異同を」一に歸す。朕(憲宗成化帝)『資治通鑑綱目』に於いて斯れ意有り。特に儒臣に命じて重ねて考訂を加えて、諸々の善本を集め、證するに「凡例」を以てす。缺くる者は、之を補し、羨(あま)る者は之を去る。事の大義に關する、未だ年を踰えずして改元するが若き者は、例に依りて之を正す。[たとえば]漢の初めの紀年の若きに至るに、首冬(前漢初期は十月を正月としていた。武帝の時になって一月を年の始めとする)なるも、惟だ景帝中後二年に舊史 誤りて冬十月を歲終に列す<sup>③</sup>。朱子[の『資治通鑑綱目』]以て疑いを傳うと雖も、而れども呂東萊(呂祖謙)の『大事記』已に次年を首に考え正す。此れ則ち宜しく呂氏に従うべし。其餘は、「書法」と「凡例」とは小しく異なるも、大いに關涉する者無ければ、悉く其の舊に仍らしむ。[そして]、盡く「考異」・「考證」を去り、並びに傳えしめず。[それは]學者の疑いを免れ、朱子の筆削の志を成す所以なり。考訂・上呈 具さに朕(憲宗成化帝)の意の如し。『資治通鑑綱目』是に於いて完書と爲る。於戲、是の書の載せる所は、周・秦・漢・晉より南北朝・隋・唐を歴て以て五季に及ぶ。凡そ千三百六十二年の間、明君・良輔は以て其の功を昭らかにし、亂臣・賊子<sup>④</sup>は其の罪を逃れる所無く、而して疑事・悖禮は咸な以て折衷するを得ること有り。後世の君と爲り臣と爲る者をして、之に因りて以て鑒戒(いましめ)・勸懲(勸善懲惡)とし、而して存心・施政は胥な正道に由りて善治に臻るを圖らしむ。其れ名教に於いて、豈に小補<sup>⑤</sup>あらんや。然らば則ち是の書は、誠に以て先聖の『春秋』を繼ぎ、後人の軌範と爲すに足る。其の傳うるを廣くせざる可からざるなり。因りて命じて定本を繕録し、附するに「凡例」を以てし、并せて諸を梓に刻し以て傳う。爰に首に序し、簡に讀者をして自から云う所を知らしむ(『大明憲宗繼天凝道誠明仁敬崇文肅武宏德聖孝純皇帝實錄』卷之一百十三・「成化九年二月丁丑(十六日)」条)。

①『左傳』成公十四年に「君子曰、春秋之稱微而顯、志而晦、婉而成章、盡而不汙、懲惡而勸善、非聖人、誰能修之(君子 曰く、『春秋』の稱(書法)[字数は]微なれども[意味は]顯かなり。[つぶさに]志すも晦なり(露骨ではない)、婉[曲]にして章を成し(道理が通り)、盡くして汙ならず(はっきりと直言する)、惡を懲らして善を勸む。聖人に非ざれば、誰か能く之を修めん)」。

②『漢書』宣帝紀に「詔諸儒講「五經」同異、太子太傅蕭望之等平奏其議、上親稱制臨決焉(諸儒に詔して「五經」の同異を講ぜしむ。太子太傅の蕭望之等 其の議を平奏す。上(宣帝)親から稱制して臨決す)」。

③『孟子』滕文公下に「孔子成春秋、而亂臣・賊子懼(孔子『春秋』を成して、亂臣・賊子懼る)」。

④『孟子』盡心上に「夫君子所過者化，所存者神，上下與天地同流，豈曰小補之哉（夫れ君子の過ぐる所の者は化し，存する所の者は神なり，上下 天地と流れを同じくす，豈に之を小補すと曰わんや）」。

⑤『尚書』伝孔安國序に「所以恢弘至道，示人主以軌範也（至道を恢弘<sup>かいこう</sup>し，人主に示すに軌範を以てする所以なり）」。

朕（憲宗成化帝）がもっぱら考えるに，朱子の『資治通鑑綱目』は，『春秋』經・傳の体例を備え，天理を明らかにし，人倫を正すものである。善事を褒めて悪事を貶めるということについて，ことばが厳密に用いられ，意味が精密である。世間や後世に大きな功績がある。ただ，

- ✓ 9) 「景帝中後二年，舊史誤列冬十月歲終」については理解しにくい。景帝の「中二年」・「後二年」の意味とするならば，宋刻本（中華再造善本影印版）『資治通鑑綱目』卷四の「孝景皇帝中二年」条は，

〔孝景皇帝中〕二年，春三月，徵臨江王榮下吏，榮自殺○夏四月，有星孛于西北○立子越爲廣川王，寄爲膠東王○秋九月，晦日食○梁王武使人殺袁盎（宋刻本（中華再造善本影印版）『資治通鑑綱目』卷四・「孝景皇帝中二年」条・九葉）。

とあり，「孝景皇帝後二年」条は，

〔孝景皇帝後〕二年，春正月地一日三動○禁内郡食馬粟没入之○夏四月，詔戒二千石脩職事。詔賞第四得官。秋大旱（宋刻本（中華再造善本影印版）『資治通鑑綱目』卷四・「孝景皇帝四年」条・十三葉）。

となっていて，「冬十月」については記載がない。

ただし，「孝景皇帝四年」条は，

〔孝景皇帝〕四年，春復置關用傳出入○夏四月，立子榮爲皇太子。徵爲膠東王○敕○冬十月，晦日食。徙衡山王勃爲濟北王，廬江王賜爲衡山王（宋刻本（中華再造善本影印版）『資治通鑑綱目』卷四・「孝景皇帝四年」条・七葉）。

とある。また，「孝景皇帝中四年」条は，

〔孝景皇帝中〕四年，夏蝗○冬十月，日食（宋刻本（中華再造善本影印版）『資治通鑑綱目』卷四・「孝景皇帝四年」条・十一葉）。

となっていて，「冬十月」が「歲終」に置かれている。

そして，憲宗成化帝が校訂・出版を命じた成化刻『資治通鑑綱目』では，「孝景皇帝四年」条の「冬十月，晦日食」は，「孝景皇帝五年」条に移され，

〔孝景皇帝〕五年，冬十月，晦日食○春正月，作陽陵邑，募民徙居之……（成化刻『資治通鑑綱目』第四・「孝景皇帝五年」条・六葉～七葉）。

となっている。

また，「孝景皇帝中四年」条の「孝景皇帝中」四年，夏蝗○冬十月，日食」も，

〔孝景皇帝中〕四年，夏蝗

〔孝景皇帝中〕五年，冬十月，日食○夏，立子舜爲常山王……（成化刻『資治通鑑綱目』第四・「孝景皇帝中五年」条・九葉）。

と変更されている。ただし，「孝景帝中二年」・「孝景皇帝後二年」条は，宋刻本の記載のままである。

さらに，呂東萊の『大事記』卷十一・「漢孝景皇帝」条も，十月の「日食」の記事は，「以本紀修（本紀を以て修す）」と割注が付され，「孝景皇帝五年」・「孝景皇帝中五年」に移して記載されている。

成化刻『資治通鑑綱目』において，「孝景皇帝四年」条と「孝景皇帝中四年」条に変更が加えられ，「孝景帝中二年」条・「孝景皇帝後二年」条ともにそのままであることや『大事記』の記載からすると，憲宗成化帝の序文の「景帝中後二年」は，「景帝〔年間〕中の後二年」と理解するのではなく，「景帝〔年間〕中の後ろの二つの年」と解釈するのであろうか。もしくは，武断に過ぎるが，「景帝中後二年」の「中後」を「前中」の誤記だとし，「景帝〔年間〕の前・中の二つの年」とすると，意味が通るように思う。また，「中後二」を「前中四」の誤記だと考えると，「景帝〔年間〕の前・中の二つの四年」の意味となり，さらに理解しやすい。

次々と刻されて年月がち、欠けたところや異同がでてきた。甚だしくは『資治通鑑綱目』の書法と朱子が著した「凡例」・「提要」とが同じでないところがでてくるようになった。こうしたことから、後の人は、『資治通鑑綱目』と「凡例」・「提要」とを疑い、「考異」・「考證」の注釈書を作り、両者の説を併記し、どちらとも定めることができなかった。朕（憲宗成化帝）は前にその理由を深く考えた。おそらく、「凡例」・「提要」は朱子自身が書き上げ、門人に授けて、それにしたがって『資治通鑑綱目』を作らせた。書物が完成すると、再び加筆や削除を行ない、それぞれの事例によって文言を立てたので、時に少しの異同が生じたのであろう。しかしながら、大体は勸善懲惡の枠組みから外れる者ではない。どうしていちいち細かいことを疑わねばならないのか。むかし、五經の異同について、漢の宣帝の命で、儒者たちが石渠閣で議論し、皇帝がみずから制書を下して、石渠閣に臨席して決定していった。そうして、[五經の異同を]ひとつにまとめたのである。朕（憲宗成化帝）も、『資治通鑑綱目』において同様の考えを持っている。特別に儒臣に命じて、再び考訂を加え、種々の善本を集めて、「凡例」にしたがって考証を行ない、欠けているところは補い、余分なところは削除する。年を踰えないで改元するといった大義に関することは、用例によって正す。たとえば、前漢のはじめの紀年は、「十月」から始まるとしていた。ただ景帝の「景帝中後二年」は、『史記』において「冬十月」の記述を最後に並べている。朱子[の『資治通鑑綱目』]は、その疑問のあるままにしている。しかし、呂東萊の『大事記』では、「十月」を最初に持ってきて訂正している。ここは、呂東萊に従うべきであろう。それ以外は、「書法」と「凡例」と少しばかり異なっているものの、大きくかわることがないので、すべて元のままにしておく。そして、すべて「考異」・「考證」を削除し、伝えないようにする。それは、学ぶ者たちに疑問を起こさず、朱子の書くべきは書き、削るべきは削るという教えを伝えたいがためである。考訂させ、上呈させたのは、すべての朕（憲宗成化帝）の考えである。『資治通鑑綱目』は、ここに完全な書物となる。ああ、この書物に載せてあるのは、周・秦・漢・晉より南北朝・隋・唐をへて五代末に及んでいる。すべて千三百六十二年の間、明君や輔弼の臣は、その功績を明らかにし、亂臣・賊子は罪せられることを逃れられない。判断に苦しむような事や礼にもとるようなことは、すべて『資治通鑑綱目』を尺度にして是非を定める。後世の君主となったり、臣下となったりする者は、『資治通鑑綱目』を拠りどころとして、いましめや勸善懲惡とする。心情や実地の政務は、すべて正しい道理によって、善政にいたるよう導くようにさせる。名教において、すこしばかりすきを埋めるようなものであろうか。そうであるならば、この『資治通鑑綱目』は、先聖の『春秋』を継いで、後の人の規範となるに足るものである。広く伝えるべきものである。そこで定本を作成し、「凡例」を附して、刻して広めることを命じた。ここにはじめに序文を記し、簡単に言いたいことを伝える、という。

憲宗成化帝は、朱子の『資治通鑑綱目』を、『春秋』經・傳の体例を備え、天理を明らかにし、人倫を正す書物であるとする。さらに、善事を褒めて惡事を貶めるということについては、

ことばが厳密に用いられ、意味が精密であり、世間や後世に大きな功績がある、と理解していた<sup>10)</sup>。

さらに、『資治通鑑綱目』に倣って編纂させた『續資治通鑑綱目』の序文でも、憲宗成化帝は、朱子の『資治通鑑綱目』について、つぎのようにいう。

[成化十二年十一月] 乙卯(十五日),『續資治通鑑綱目』成る。上(憲宗成化帝)序文を製り以て其の首に冠して曰く、朕(憲宗成化帝)惟うに天地の綱常(君を臣綱とし、父を子綱とし、夫を妻綱とするのを「三綱」、仁、義、禮、智、信を「五常」)の道 諸經に載り、古今の治亂の蹟 諸史に備わる。昔の帝王より「人文(人間の道徳的なありさま)を持って天下を化成す<sup>①</sup>」るは、未だ始めより經史に資らずんばあらず。我太宗文皇帝(永樂帝)五經・四書を表章し、『大全』を輯成す。綱常の道、粲然として復た明らかなり。後に作者有るも、「尚<sup>くわ</sup>う可からざるのみ<sup>②</sup>」。朕(憲宗成化帝)祇だ丕緒(國家の大業)を承け、經訓に潛心(專念)し、服膺すること有年(多年)なり。間に歷代の史書を閱むに、舛雜(雜駁)浩繁にして、殫<sup>あまね</sup>紀める可からず。惟だ宋儒の朱子 司馬氏の『資治通鑑』に因りて、著して『[資治通鑑] 綱目』を為し、權度(基準:標準,法則)精切(適切)、筆削 謹嚴なり。周の威烈王より五季に至るまでの治亂の蹟 瞭然(明白)なること諸を掌<sup>これ たなごころ</sup>に視るが如し<sup>③</sup>。蓋し深く孔子の『春秋』の心法を得る者有るなり。展玩(賞玩)の餘(之後;以後)、因りて儒臣に命じて重ねて校訂を加え、鈐梓頒行さす……(『大明憲宗繼天凝道誠明仁敬崇文肅武宏德聖孝純皇帝實錄』卷之一百五十九・「成化十二年十一月乙卯(十五日)」条)。

①『易』賁卦彖傳に「觀乎天文以察時變、觀乎人文以化成天下(天文(自然のありさま)を觀て以て時の變を察し、人文(人間の道徳的なありさま)を觀て以て天下を化成す)」。

②『孟子』滕文公上に「曾子曰、不可。江漢以濯之。秋陽以暴之。皜皜乎。孟子不可尚已(曾子曰く、不可なり。[先師孔子の徳は]江漢 以て之を濯い、秋陽 以て之を暴す。皜皜乎として尚う可からざるのみ、と)」とあり、「尚、加也(尚は、加えるなり)」と朱子は注する。

③『中庸』第十九章・第六節に「治國其如示諸掌乎(國を治むるは其れ諸を掌<sup>これ たなごころ</sup>に示るが如しか)」。

朕(憲宗成化帝)は以下のように考える。天地の三綱五常の道理は經書に載せられているし、古今の治亂のありさまは史書に備わっている。古来の帝王から「人文(人間の道徳的なありさま)を持って天下を化成(教化)する」のは、はじめから經書や史書に頼らないものはない。

10) 景泰帝も、朱子の『資治通鑑綱目』について、つぎのようにいう。

……朕(景泰帝)惟うに古昔の帝王の盛徳大功は諸を典謨・訓誥・誓命の文に載す。春秋二百四十二年の事は孔子褒貶の書(『春秋』)に著わし、鑒と為すに足る者にして、「尚<sup>くわ</sup>う可からざるなり」(『孟子』滕文公上)。周の威烈王より梁・唐・晉・漢・周の五代の事に至るは朱文公の『通鑑綱目』に書す。亦た天下後世の公論の在る所にして涙<sup>ほろ</sup>ばす可からざるなり……(『大明英宗法天立道仁明誠敬昭文憲武至德廣孝睿皇帝實錄』卷二百五十六・廢帝郕戾王附錄第七十四・「景泰六年秋七月乙亥(二日)条」)。

『資治通鑑綱目』が伝える周の威烈王から五代末までの事績は、「天下後世の公論の在る所にして涙<sup>ほろ</sup>ばす可からざるなり」としている。

我が太宗文皇帝（永樂帝）は、五經・四書を顕彰して『大全』を編纂された。そのおかげで、三綱五常の道理は燦然としてまた明らかとなった。後にこうしたことを行なうものも「加えるべきものはない」。朕（憲宗成化帝）は、ただ帝位を継承し、經書やその注釈に専念し、心に留め忘れないようにすること長年になる。その合間に歴代の史書を読んだが、雜駁で長く、すべてを理解することができなかった。ただ宋儒の朱子が、司馬光の『資治通鑑』に基づいて『資治通鑑綱目』を作り、基準が適切で、編集方法がきわめて厳格であった。周の威烈王から五代に至るまでの治乱のありさまは、掌を見るように明白に記してある。おそらくは深く孔子の『春秋』の伝える精神を得たものであろう。玩味した後、儒臣に重ねて校訂を加えて、出版して頒布することを命じた、という。

『資治通鑑綱目』を「基準が適切で、編集方法がきわめて厳格であった。周の威烈王から五代に至るまでの治乱のありさまは、掌を見るように明白に記してある。おそらくは深く孔子の『春秋』の伝える精神を得たものであろう」とするのである。

付け加えると、内閣学士の商輅（字は弘載、字は素庵。永樂十二年（一四一四）～成化二十二年（一四八六）。浙江淳安の人。正統十年乙丑科（一四四五）一甲一名の進士：明朝を通じてただ一人の郷試・會試・殿試すべての首席合格者）は、成化十三年に提出された「進續宋元資治通鑑綱目表」で、次のようにいう。

……伏して以えらく經は以て道<sup>おも</sup>を載せ、萬世の文明を闡く。史は以て經を輔し、累朝の鑒戒を昭らかにす。東魯の大聖 前に刪述し、考亭大儒 後に祖述す。此れ『春秋』もて經中の史と爲す。而して『綱目』は實に史中の經なり……（萬曆三十年劉體元刻本『商文毅公文集』卷之一・表・「進續宋元資治通鑑綱目表」・一葉）。

『資治通鑑綱目』は史書の中の經書であるとする。

このように、憲宗成化帝は『資治通鑑綱目』を、經書と同じ価値あるものとし、歴代の人々に対する正しい判断が示された書物、つまり儒教的な価値判断が明らかにされた書物であると理解していた。

すると、（2）で検討したように、『資治通鑑綱目』においてなされた漢景帝に対する否定的な評価は、正しく間違いないものだ<sup>と</sup>と憲宗成化帝が考えていたことになる。このように評価される「漢景帝」に贈られた「景」字を景泰帝に贈ったということは、憲宗成化帝の「景泰帝」に対する評価を表わしていると考えられる。

さらに、憶測にすぎないが、「資治通鑑綱目序」において、憲宗成化帝が、特に「漢の景帝」の時の紀年の齟齬を指摘しているということは、この「漢景帝」条の評価をことさらに注意してもらいたいと言いたかったと理解できるかもしれない。

また、庶子に愛情をそそいだために王室を混乱させた周の景王や、兄弟の情に薄かった三国呉の孫休などに「景」字が贈られていることも意識して、「景」字を贈ったとも考えられる。



## おわりに

帝位を返還することもなく、その地位に居座り続けた弟の景泰帝に対する怒りから、英宗は、景泰帝を「郕王」の地位に引き戻し、亡くなると「郕王」として「戾」という諡をつけた（拙稿「明・景泰帝の諡號「戾」について」（『経済理論』第384号）参照）。その英宗を継いだ憲宗成化帝は、叔父にあたる「郕王（景泰帝）」の諡号についてそのままにしておく。

しかし、憲宗成化帝は、最初に皇太子に冊立した第二子が早世したことから、第三子（後の孝宗弘治帝）を皇太子に冊立するにあたって、その無事の成長を願って、限定的な意味で景泰帝の帝號を復活するよう命じる。ただし景泰帝の廟號（明朝歴代皇帝の廟（宗廟））に入れて祭祀する）は認めなかったし、父の英宗が「郕王」につけた諡の「戾」を変更しなかった。そうして憲宗成化帝は、皇帝であった景泰帝に対して諡の「景」を贈ったのである（拙稿「明・景泰帝の帝号復活について」（『経済理論』第388号）参照）。

景泰帝の帝號を復活させる（皇帝と呼ぶことを認めた）ことにより、父の英宗が「郕王」につけた諡の「戾」を変更することなく、皇帝としての景泰帝に諡號を贈ることが可能になる。ところが、諡號を贈るにあたって、父の英宗と同様に好い感情を抱いていなかった憲宗成化帝は、明朝の皇帝に贈られる十六字の尊号を四字の「恭仁康定」に限定し、帝號の復活の詔を公示させなかった。また、景泰帝を明朝歴代皇帝の廟（宗廟）に配置することも認めなかった。そして拙稿で検討した一見するとすばらしい諡号のように思える諡の「景」字を贈ったのである。

このように諡号を通して見た憲宗成化帝の景泰帝への取り扱いも、父親の英宗と同じように冷淡である。ただ、父親の英宗が、やみくもに否定していったのに比べると複雑な批判の仕方を行なっている。こうしたことが、陳建（字は廷肇、号は清瀾。廣東東莞の人。弘治十年〔一四九七〕～隆慶元年〔一五六七〕。嘉靖七年〔一五二八〕の舉人）の、郕王（景泰帝）の憲宗成化帝に対する処置を恨みに思わず、父の英宗の意志を継承して、郕王（景泰帝）の帝號を復活させ、諡まで贈ったことは、「真に帝王の盛徳なり」との評価を得ることになる。

按ずるに、景泰の廢易儲宮は、憲廟（憲宗成化帝）以て憾みと爲さず。而して先志（英宗の意志）を追成し、其の位號を復し、加えるに美諡を以てす。真に帝王の盛徳なり（『皇明歷朝資治通紀（皇明通紀）』卷之二十二・「甲午 成化十年」条）。

さらには、清の乾隆帝の郕王（景泰帝）の処置を恨みに思わず、帝號を復活させ、諡を贈り、陵墓を修復させたことは、大いなる仁義であり、「稱す可きなり」という評価を得ることになる。

・・・憲宗 能く前事（皇太子の地位を郕王（景泰帝）によって剥奪されたこと）を以て介懷（意に介する）せず。〔郕王（景泰帝）の〕帝號を復し、尋いで諡を加え、陵を修むを命ずるの詔旨あり。亦た藹然（盛んな）たる仁義なり。景泰に于いて親親（親族への恩情を尽くす）の情を敦くし、英宗に于いて繼述（繼承）の大を成す。稱す可きなり・・・（『御批歷代通鑑輯覽』卷一百六・「成化十一年十二月、改諡郕戾王爲景皇帝」条の批文）。



[補注]

また、袁宏（字は彦伯。晉・咸和三年〔三二八〕～太元元年〔三七六〕）の『後漢紀』は、つぎのような後漢の荀爽（字は慈明。潁川潁陰（今の河南許昌）の人。後漢・永建三年〔一二八〕～建寧二年〔一六九〕）の対策を引用する。

〔永康元年（一五三年）六月甲寅〕潁川の荀爽の対策に曰く、「臣 聞く火は木に生ず。故に其の徳は孝なり。

漢の帝に諡して「孝」と稱するは、其の義 此れに取るなり（『後漢紀』後漢孝桓皇帝紀下卷・第二十二）。

後漢の荀爽によれば、漢は火徳の王朝であり、その徳目は「孝」であるので、漢の歴代の皇帝の諡の最初に「孝」字をつけるのであるという。

## On Ming Emperor Jingtai's Posthumous Names

Kunio TAKINO

### Abstract

This paper investigates the matter of Ming Emperor Jingtai's posthumous name being changed three times. The result of the investigation shows that each of the posthumous names reflects the feelings that each of the emperors who bestowed them had toward Emperor Jingtai.